

## 大学留学生に対する「わかる授業」の実践(2)

—— 講義「異文化を学ぶ」における小2国語教材「ニャーゴ」の音読指導 ——

栞原 昭徳・竹下 真生\*

Easy Understanding Lesson Story “Nyāgo” to Foreign Students (2)

—— Lesson to Read Aloud the Text in Lecture “Foreign Culture Study” ——

KUWAHARA Akinori and TAKESHITA Maki

(Received July 25, 2005)

キーワード：留学生・日本語・わかる授業・音読

本論文は、山口大学教育学部附属教育実践センター研究紀要第19号所収の栞原昭徳論文「大学留学生に対する「わかる授業」の実践(1) — 講義「異文化を学ぶ」における日本語の面白さの導入指導 —」に続く論文である。

上記論文の章立ては、

- 「1. はじめに
2. 授業の構想と指導内容
3. 授業の実際
4. 受講者のミニレポートから
5. アシスタントの学生が学んだこと」

である。

上記の内容を承けて、本論は小学校2年生の国語教科書教材「ニャーゴ」授業の音読場面の記録と考察が中心となる。

### 6. 作品「ニャーゴ」の音読場面の記録と考察

小学校2年国語教科書(東京書籍)に収録されている教材「ニャーゴ」の第1ページ目は、次のとおりである。ただし、挿絵は省略してある。

ニャーゴ

みやにし たつや

「いいですか、これがねこです。この顔を見たら、すぐににげなさい。つかまったらさい後、あっという間に食べられてしまいますよ。」  
子ねずみたちは、先生の話をいっしょうけんめい聞いています。

\*山口大学大学院教育学研究科修士課程

## 1 ■作品コピーの配布

(栞原、教材「ニャーゴ」のカラーコピーを配布する。)

栞原：「今、配ったプリントは、2年生の国語の教科書に載っているお話です。小学校2年生。小学校2年生。そうだな、『小2』(という言葉) ぐらい書いておいてください。小学校2年生ね。小2。」

(Sa [Student all、以下略]、プリントに『小2』と書く。)

\*授業者は外国人留学生3人に対する授業であることを意識して、「小学校2年生」にかかわる言葉を、何度も繰り返して言っている。

上記の授業記録のたった3行に相当する授業者の言葉の中に、「2年生・小学校2年生・小学校2年生・小2・小学校2年生・小2」と6回が繰り返されている。それも、「2年生」から「小2」という表現にいたるまで、様々な言い方をしているのである。

この指導言の最後の部分「そうだな、『小2』 ぐらい書いておいてください」という指示によって、留学生たちは日本語の「小2」を筆記するという活動に取り組むことになる。何気ない「書いておいてください」などの言葉ではあるが、簡単に「活動」を引き出すことのできる働きかけとなる。

このほかに、「○○に赤丸を付けておいてください」とか、「○○のところにアンダーラインを引いてください」などの指示を意識的に使っている。

栞原：「そしたらね、ここ（作品の前の1ページを使って、単元名と学習の仕方が書かれている。）はね、小学校の先生と子どもに対して、この『ニャーゴ』という作品をこんなふうに勉強しましょう、というお勉強の仕方が書いてあるんです。

ここは（この授業では）読みません。（注1）」

## 2 ■題名と作者名の音読をめぐって

栞原：「ここ（作品の始まり）から読みましょう。ね、ここから。

読めるかね。そしたら、イホールさん。これ（題名）とこれ（作者名）をちょっと読んでみてください。」

イホール：「ニャーゴ。みやにし、たつや。」

（イホール君の音読の声を聞いている留学生の顔に笑みが浮かぶ。ニャーゴという猫の鳴き声が題名となっているからである。）

栞原：「はい、いいです。『ニャーゴ』。『ニャーゴ』ってね、何でしょうね。」

ジョージ：「ねこの、音かな。」

栞原：「ねこの音、いいです。ねこの、鳴き声。」

ジョージ：「はい。」

栞原：「ねこの鳴き声、『ニャーゴ』。ちょっと二人（アシスタントの日本人学生に向かって）、発音してみてください？」

竹下：「ニャーゴ。」

(Sa、笑う)

森田：「ニャーゴ。」

\*この授業のアシスタントとして教育学部4年、栗原研究室の2名の女子学生が手伝ってくれた。授業者の教師が「ニャーゴ」と音読してみせるだけではなく、アシスタントの二人が音読することにより、単純に音読の回数が3倍となる。

また、アシスタントの二人が音読している間に、授業者は外国人受講者の様子を余裕を持って観察することができる。

外国人留学生とアシスタントの学生は同年齢の学生同士ということもあり、共に顔を合わせるだけで和やかな雰囲気 of 授業となった。

栗原：「まあ、こんなかわいいねこがいたらいいですけどね。」

(Sa、笑う)

\*学習内容とは関係のない言葉ではあるが、ジョークに対する留学生たちの素早い反応がよい。日本語を理解しているがゆえの反応であり、この反応のよさを利用して、内容の理解度のチェックに使うことになる。

栗原：「はい、それでね、日本語ではね、これ（ニャーゴ）を、カタカナといいますね。カタカナといいます。もともとこの作品は、絵本だったんですね。絵本でね、そのときには、『にゃーご』、こういう文字（平仮名）でした。」

竹下：「これです。（絵本の表紙を提示する）」

栗原：「おっ、ありがとう。これが絵本です。この絵本を、じつは教科書に入れたんですね。元はこれです。（注2）」

『みやにしたつや』というのはね、漢字ではこう書きます。（「宮西達也」と板書する）これを、小学校の2年生は、まだ漢字を習っていないから、ひらがなで書いてあります。

はい、そしたら、ジョージ君、もう1回、『ニャーゴ、みやにしたつや』とはっきり読んでごらん。」

ジョージ：「ニャーゴ、みやにし、たつや。」

栗原：「うん。みやにしたつや。ニャーゴ、みんなで言うてごらん。ニャーゴ、はい。」

(Sa、口々に『ニャーゴ』という)

\*国語授業の中での音読は重要な役割を果たす。

まず、音読ができるためには、日本語の文章を理解して最低限の発音の仕方を身に付けておく必要がある。3名の留学生の日本語能力を見極めるためにも、この音読は、授業の初めの部分で必要となってくる。

次に、音読することで、参加者は文章中のどこを問題にしているかがわかり、音読する部分に集中することができる。とりわけ、小学校低学年の授業においては、一斉音読の果たすこの役割が大きい。音読という活動に集中すれば、問いに対する答えはおのずと浮かび上がってくる。

日本語に習熟していない外国人留学生の場合であっても、音読することにより日本語の発音に慣れ、音読体験を通して日本語を習得できる。ここでも、個人の音読と全員による一斉音読を意図的に導入している。以下、この授業では、意図

的な音読の練習場面が多く取り入れられている。

このように、授業においては、新しい知識を獲得する（認識）とともに、その知識を定着させること（練習）もなされなくてはならない。ドイツ教授学の教えてくれる「授業指導の智恵」である。クリングベルグ (L. Klingberg) は、これを「認識と練習の統一」と表現している。

栞原：「なんか、鳴き声がうまくなってもどうしようもないんだけど、まあ、せっかくだからね、ニャーゴ。そして、みやにしたつや、言ってごらん。」

(Sa、口々に「みやにしたつや」という)

栞原：「みやにし」(ゆっくり、はっきり発音する)

ジョージ：「みやにし」

栞原：「みやにし、たつや」

ジョージ：「たつや、たつや。」

栞原：「あの、外国の人がね、人の名前を呼ぶときなんかはね、例えばね、み (mi)、や (ya)、に (ni)、し (shi)、というふうに、一字ずつていねいに読むといいわけですよ。た (ta)、つ (tsu)、や (ya)。言ってごらん。」

ジョージ：「た、つ、や」

栞原：「た、つ、や」

馬：「た、つ、や」

ジョージ：「た、つ、や」

\*一音ずつ、ていねいに発音練習をしている場面である。この練習で、外国人留学生の発音の仕方は急速に上達している。

栞原：「うん、そんなふうに読むとね、ああ、この人は、日本語がよくわかるなって(思われます)。なぜかというと、日本語はね、『み』『や』『に』『し』でしょ。こういうふうに独立した言葉(音)だから。続けなくて、『み、や、に、し、た、つ、や』というふうに(一音ずつ)発音するとね、ああ、この人よく勉強してるな、よくわかっているなというように聞こえてくるんです。ね、はっきりですね。」

### 3 ■ 会話部分の音読練習

栞原：「はい、そのつぎ。」

『いいですか、これがねこです。このかおを見たら、すぐになげなさい。つかまったらさい後、あっという間に食べられてしまいますよ。』(授業者の範読)

これはね、こういう(「…」の記号を板書する)のでね、囲まれているでしょう。わかりますか、ここ。ね、はじめと終わりに。これをね、正しくは、『かぎ』といいます。この『かぎ』の中は、実は、ねこの先生が言った、言葉、人の言葉なんです。それじゃあね、ひとりひとり練習してください。(と、練習を促す)みんなにちょっと読んでもらいます。」

(留学生、練習する。その後、一人ひとりが音読する。)

ジョージ：「いいですか、これが、ねこです。この顔を見たら、すぐに、こげなさい。」

栞原：「にげなさい。」

ジョージ：「あっ、にげなさい。つかまったら、さい後、あっという間に、食べられて、  
しまいますよ。」

栞原：「おお、こりゃあ、上手ですよ。はい、上手です。」

イホール：「いいですか、これがねこです。この顔を見たら、すぐに、にげな、さい。つ  
かまったら、さい後、あっという間に、食べられ、て、しまいます、よ。」

\*留学生の一人が音読している間に、他の留学生はそれを聞きながらの学習を進  
めている。3名という少人数での学習は練習する回数も多くなり、語学の習熟の  
ためには能率の上がる人数と考えられる。

栞原：「いいですよ。はい、じゃあ、馬さん。」

馬：「はい。いいですか、これが、ねこです。この、顔を見たら、すぐに、にげ、にげ  
なさい。つかまったらさい後、あっ、あっ…」

栞原：「あっという間に。」

馬：「あっという間に、食べられて、しまいますよ。」

栞原：「はあい。3人とも上手です。」

\*この場面でも、3人の留学生に音読してもらい、音読の実態に応じた評価や、  
その人の実態に応じた対応をしている。少人数指導のメリットである。

たまたま「あっという間に」のところで「あっ、あっ…」と読み詰まった馬さ  
んに対しては、授業者が「あっという間に」とゆっくり発音をしてみせた。その  
直後、馬さんは一度で正しい発音ができています。

#### 4 ■句読点の読み方の指導

栞原：「そしたらね、つぎにね、日本人の（小学校の）先生だったらこういう読み方をす  
るとい読み方をします。

\*教育学部への留学生は、単なる日本語学習者ではない。母国に帰れば、日本語  
を担当する教師として、あるいは母国の小学校教師として教壇に立つ可能性もあ  
る。（現に3人のうちの一人は、母国で小学校教師になりたいと教えてくれた。）  
このことを考慮して『日本人の（小学校の）先生だったら』という言葉を使って、  
教師としての指導技術の一つとして『音読の指導方法』を伝えようと考えた。

栞原：「それはね、あなた方は3人ともかなりよくできていましたけどね、問題はね、（文  
章の中の）点と丸なんです。

これ（、）が、点とといいますね。これ（。）が丸とといいますよね。これを合わせて  
何というか知っていますか。」

（Sa、習っていない、もしくは知っていない様子。）

栞原：「習ってない？ まず、点のことは、読むときに、ちょっと息をするというか、ちょっ  
と間をとる。読み点、これをね、読点（どうてん）と読みます。

丸のことをね、句点（くてん）といいます。合わせて、句読点といいます。つまり、点や丸ですね。句読点。句読点。

そしてね、読むとき、（小学校の）1年生や2年生にはね、どうやって教えるかというね、『いいですか』のうしろ、点があるでしょう。そのときにはね、先生がこうやってやったらいいんです。『いいですか』…」

（栗原、静かに手を上下に動かして1拍分のリズムをとる）

栗原：「こうやってね、リズムを1拍くらいとります。

『いいですか、』（1拍）『これがねこです。』（2拍）こんなふうにして。」

馬：「わあ。」と驚きの声をあげる。

栗原：「（小学校の）1年生や2年生に、リズムをとって、みんなで（一斉に）音読するんです。それで（1年生や2年生たちは）うまくなるんです。」

\*一斉音読の途中で句読点が出てくると、たとえば読点（、）のところでは、教師が両手を合わせて拍手をしたり、頭部を前後に揺らしたり、手で脚部をたたいて音を出すなどして、1拍分ほど音読を休止する。また、句点（。）では、その倍の2拍を休む。これらの動作は、日本の小学校低学年の国語教育実践の中で編み出された基本的な教育技術の一つである。

この指導技術に対して、中国人留学生の馬さんが「わあ」と驚きの声をあげたのである。文字どおりの「驚くほど子どもに寄り添った」子どもにわかりやすい音読の指導方法である。

一斉の音読がスムーズにできる学級での国語授業は、集中力があり、当然のことながら学習量も多くなり、学習の効率も高くなる。それとは逆に、一斉音読もスムーズにできない学級の国語授業は、学習量も極端に少なくなる。

栗原：「今度ね、あなた方ね、日本の文章を読むときにはね、『いいですか、』（1拍）『これがねこです。』（2拍）『この顔を見たら、』（1拍）『すぐににげなさい。』（2拍）『つかまったら』でやるのではなくて、『つかまったらさい後、』（1拍）『あつという間にたべられてしまいますよ。』（2拍）そして、『子ねずみたちは、』（1拍）『先生の話を一っしょうけんめい聞いています。』（2拍）

こんなふうを読むとね、まるで（日本人の小学校の）先生みたい（になります）。わかった？」

馬：「はい。」

栗原：「じつをいうと私はね、小学校の先生を9年間（経験）しているんです。そして35歳のときから大学の先生になりました。

だから今でもね、あの、まあ、あまり上手でない先生の授業（の続き）を、パッとやってみせますよ。（現場の先生は）困りますよね、こんな人がいると。

そして、教えるのは、今みたいなことですよ。日本人の先生でも、『いいですかこれがねこです』って（句読点を気にしないで続けて）言って、点や丸をやらないんです（教えないのです）。そしたら、子どもが、（上手な音読の仕方が）できないんですね。

なぜ点があり、なぜ丸があるか、わかりましたか。」

## 5 ■着席の姿勢や座り方の指導

栗原：「さあ、そしたらね、子どもたちには、授業のときには、(教師は) こうやって、立って教えます。

そしてね、姿勢も大事なんです。読むときに。えっと、ウクライナのイホール君は、(今) こうやってやっている。(頬杖をついている)」

(Sa、笑う)

栗原：「これはね、小学校1年生なら「こうやって」と言うんですよ。(姿勢を正す真似をしながら) ついでにね、子どもに座り方も教えるんです。

できるだけ、この腰を深く、背中をこの(椅子の後ろの)板につけるようにして、そのうえね、座るときにね、深く座ってうしろにつけて、そしてね、お腹とこの板の間にね、げんこつ、これが1個入るくらい。これがいちばんいい姿勢なんです。やっごらん。」

(Sa、それぞれ姿勢を整える)

\*この場面での着席の仕方や姿勢の指導は、相手があくまでも外国人留学生であるから用いる指導方法である。すでに着席の仕方や正しい姿勢の仕方を習っていたり、すでに知っている日本の小学校の子どもたちに対しては、以上のような留学生に行ったような指導方法をとる必要はない。

私の経験では、日本の小学生にこの着席の姿勢やすわり方を指導しようと思えば、授業の始めに「自分が一番よいと思う姿勢をしてごらん」と言うだけでよい。これまでの小学校生活の体験の中で知っている座り方のうち、一番よい着席の仕方や姿勢を自主的に選び取らせるだけでよいのである。

ジョージ：「おお。」(ジョージの体が大きいので、足が机と椅子の間に入らない)

栗原：「おお。入らんかね。ごめんね。」

(Sa、笑う)

栗原：「これは、机の構造がよくない。構造がよくないときには、体を変えなさい。

…ということはできないね。」

(Sa、笑う)

栗原：「ああいう、洒落がわかるのがすばらしいですね。」

\*大きな体のジョージ君にとっては、日本人の体の大きさに合わせて作ってある机や椅子に正しい姿勢で座ることはできない。けれども、授業者の栗原は、「ごめんね」と言ったあとで、「(机の) 構造がよくないときは、体を変えなさい」と無理難題を吹っかけている。もちろん冗談(ジョーク)である。

それに対して、留学生たち全員が「笑う」ことで乗り越えてしまった。授業者が日本語で発したジョークであったが、簡単に理解したからこそその「笑い」である。このように、ジョークは「ありもしない、あるいは出来もしない仮定法」の世界である。その場のとっさの判断でくり出す教師からのジョークが、相手が聞いているかどうか、理解できているかどうかをチェックする機能を果たすことがある。時に栗原は、意図的に用いることがある。

栞原：「そしてね、えっと、だいたい読むときはね、教科書は、こんなふうに、下に置いてね、読みます。

そしてね、立って読むときは、だいたいね、こうやって（教科書を少し倒して下を向く）もいいですが、まあ、こうやって（教科書を両手で持って、立てて前を向くの）もいいですね。

まあ、ふつう、小学校1年生や2年生は、こうやって（教科書を両手で持って、立てて前を向く読み方で）読みますね。

下を向いて読むとね、のどが圧迫されてね、いい声が出ないんです。だから、必ず、小学校の子どもたちは、こう前を向いて、まっすぐな姿勢で、こうやって読みます。これがいい声が出る。

だから先生もね、先生はさすがにこうやっては読みませんが、教科書をこう持って、ときどき子どもたちが参加しているかどうかを見ながら、そして読むんです。」

## 6 ■プロ教師の時計の仕方

栞原：「さらにね、プロの教師はどうするかというとね、時計があるでしょう。時計をね、まあ授業中、こうやってやりますね。（腕時計を見るしぐさをする）『おっ、何時かな』とか言ってね。

そしたらね、子どもがね、『あっ、そろそろ給食だな』とかね、『あっ、先生は時間を気にしているな』、『もう（授業を）やめたいんだな』とかね、（子どもたちの意識が）授業から、（学習の）中身から、離れるんですね。

ですから、プロの教師はどのような時計の仕方をしているかという、女性がこう（時計の文字盤を腕の内側にしてはめる）するでしょう。こうして、教科書を見ながら、この視野の中で（時計を見るのです）。

\*教職は「他人の視線」を全身にわたって浴びる仕事だと表現することができる。現実の授業においては、始めから終わりまで、子どもからの視線を浴びながら取り組む仕事となる。

栞原の新任教師の体験を思い出してみても、教師を見る子どもの視線は「針の先のように鋭い」。また、教職経験が増えても、とりわけ学年始めに初めて子どもと出会うときの視線は痛いほどである。だからこそ、教師の手の動き一つ、視線の動かし方一つが、子どもに対する大きなメッセージとなることを忘れてはならない。

授業の中で教師が腕時計を見るときの視線一つによって、子どもたちを学習内容から遠ざけてしまうことにもなる。

優れた実践家はこの事実を熟知していて、たとえ授業中に廊下を通る校長先生や参観者がいても、不用意に視線をそちらに移すことはしない。

また、授業研究会などで、たとえ多くの授業参観者が教室内にいても、不用意にそちらに視線を向けることもしない。教室の前の黒板と一番後ろの子どもの座席と左右の両端の座席を囲む範囲の中で視線を動かし、子どもたちのいる範囲の外に視線を向けることはしないのである。



栗原：「だいたいね、(授業中) 子どもの前でこんなこと(腕時計を見るしぐさ) しながらする先生はもう、プロではありません。それは、子どもの意識を、教科書の中身からはずしてしまうんです。

わかりました？ 教師というのは、そこまで気をつけなきゃいけないんですよ。

えっと、まあ、(留学生の君たちにとっては) そんなことはどうでもいいんですけど。

ごめんね、ついつい、(私の教師としての) プロ意識が出てしまいました。』

## 7 ■音読の練習

栗原：「そしたらね、もう1回、これ(物語の題名と作者名と最初の会話の部分) をね、点と丸に気をつけて、読んでみてください。

そして、(アシスタントの) 二人にも、後で読んでもらうから。日本人の代表ですからね。」

(Sa、笑う)

栗原：「ちょっと、練習してみて。」

竹下：「はい。」

(Sa、音読の練習をする)

栗原：「おお、だいぶ(留学生の) 姿勢がよくなった。…いいですねえ、練習をよくしていましたね。それじゃあ、馬さんからいこうか。ゆっくりでいいですから。」

馬：「はい。」

栗原：「そうだな、『ニャーゴ みやにしたつや』から、ここまで読んでくれるか。」

馬：「はい。『ニャーゴ。みやにしたつや。いいですか、これがねこです。この顔を見たらすぐに…』」

栗原先生：「ん？『見たら』、点。」

馬：「あっ、『見たら、すぐににげなさい。つかまったらさい後、あっという間に食べられてしまいますよ。』」

栗原：「はい、上手です。いいです。」

(Sa、拍手)

\*馬さんは、『この顔を見たら、すぐににげなさい』と書いてある部分を、『この顔を見たらすぐに…』のように、読点を意識しないで、続けるようにして音読した。しかし、栗原の「ん？『見たら』、点。」という注意の言葉で、すぐに気付いた。そして、正しく音読した。これに対する授業者の「はい、上手です。いいです」の言葉は、馬さんの音読活動に対する評価の言葉である。

評価とは、一定の価値をめぐって、評ずること(あれこれすること)であり、馬さんの読み方が「上手であった」と認めていることを示す言葉である。このような評価の言葉を栗原は「その場での取り上げ評価」と呼び、授業の中で重視している。

これに対して(Sa、拍手)とは、参加している学生たち全員による拍手による肯定的評価を意味している。馬さんの読み方に対する「学生による相互評価」である。この拍手をするという行動が生まれるためには、馬さんの読み方に耳を

傾け、上手な読みであったかを判断し、その結果、拍手という行動として表現しなくてはならない。このような相互評価としての拍手ができること自体、参加者の全員が積極的にこの授業に参加していることの証拠である。

## 8 ■ 題名・作者名から本文への間のととり方

栞原：「それでね、さらに上をいくと（難しいことをすると）ね、題、題名ですね。人の名前、作者ですね。その間に、ちょっと、間があるといいです。

読みますよ、私が。

『ニャーゴ（間）みやにしたつや（間）いいですか、これがねこです。』ってね。

『ニャーゴ』と『みやにしたつや』、この間に、時間がかかるんです。これを、『間（ま）』といいます。間が抜けると、あまりよくない言葉ですが…」

（栞原、『まぬけ』と板書する。）

栞原：「聞いたことない？」

馬：「まぬけ。」

栞原：「『まぬけ』。これはね、あまりいい言葉ではありません。『まぬけ』というのはね、『fool』に値する日本語です。つまり、間が抜けてしまって、つぎつぎに（間を空けないで）読むと『foolish』なんです。

じゃあ、間をどんどん、増やせばいいかということ、多すぎてもよくないんです。」

（栞原、並べて『まのび』と板書する）

栞原：「『まのび』というのはね、（間が）延びすぎて、もう、とろとろしてよくないのが、『まのび』なんです。

（アシスタントの二人がしきりと感心しながら聞いている様子）なんか今、（アシスタントの）日本人の学生がいちばんよく勉強しているようですよ。」

（Sa, 笑う）

栞原：「（音読をするときの間（ま）の勉強をして）『まぬけ』まででてくるなんて、驚きでしょう。」

竹下：「はい。」

栞原：「『まのび』もある。つまり、『間』というのは、早すぎても、『まのび』遅すぎてもよくないんです。じゃあ、それに気を付けて、もう1回、馬さん、やっごらん。すぐ、できるはずよ。はい。」

馬：「ニャ、ゴ。」

栞原：「ニャーゴ。」

馬：「ニャーゴ。」

栞原：「うん。」

馬：「『ニャーゴ（間）みやにしたつや（間）いいですか、これがねこです。この、この顔を見たら、すぐににげなさい。つかまったらさい後、あつという間に食べられてしまいますよ。』」

栞原：「はあい。いいです。うん。」

（Sa, 拍手）

栞原：「今度は、そのくらいやれたら、日本ではなくて、中国で、日本語の先生になれますよ。うん。そういうふうにして読むと。」

で、日本語を教えるときにわからないことがあったら、ぼくにたずねてきてください。」

馬：「はい、わかりました。」

\*これも教師のとっさの判断でジョークのつもりで言った言葉である。馬さんが「中国で日本語の先生になれるくらいに」間の取り方が進歩した事実を指摘し褒めているのである。その根底には、「中国で日本語の先生になれるくらいに」日本語を習得してほしいとの願いもある。

これに対して、馬さんは「はい、わかりました」と、まっすぐに応答した。

栞原：「じゃあ、えっと、お名前が難しいんだ。ジョージ君でいいかいね。」

ジョージ：「はい。」

栞原：「はい、ジョージ君、それじゃあ。先生になったつもり（で読んでください）よ。」

\*留学生が音読をはじめるときの教師の指示「先生になったつもりよ」は、言われた当事者にとってはわかりやすい言葉のようだ。すぐに行動の変化が見られることを確かめてきた。

外国人留学生の場合にも、この言葉に励まされて音読が上達している。

ことに小学校低学年の子どもにこの言葉を投げかけると、目の前の先生（授業者）にそっくりの読み方になる。

この「先生になったつもりで」という言葉は、黒板での説明の仕方を指導する場面をはじめ、あらゆる場面で用いることができる。

ジョージ：「はい。『ニャーゴ（間）みやにしたつや（間）いいですか、これがねこです。この顔を見る、見たら、すぐになげ、すぐになげなさい。つかまえたらさい後、あっという間に食べられてしまう、しまいますよ。』

栞原：「はい。いいです。」

(Sa、拍手)

栞原：「最初から比べたら、本当にうまくなったね。」

そしたら、えっと、お名前を（私が）覚えんのがいかんのだがな、イホールさん。お願いします。」

イホール：「『ニャーゴ（間）みやにしたつや（間）いいですか、これがねこです。この顔を見たら、すぐになげなさい。つかまったらさい後、あっという間に食べられてしまいますよ。』

栞原：「はあい。うまい。」

(Sa、拍手)

\*3人の留学生の音読の上達ぶりに、授業者の栞原はもちろんのこと、アシスタントの日本人学生も驚くことになった。

## 9 ■ 声の高さに気をつけて

栗原：「さらに、よくなることを言いましょうか。声の高さです。

どちらかという、(男子留学生の) お二人は体が大きいからね、キャビネットが大きいからね、(どうしても声がこもりがちになるのです)。

低いとね、声がこもるとい、子どもからいうと、聞きにくいんですよ。

お二人は特にね、少し高めの声を出してみてください。(といっても) あの、ソプラノ歌手ではないですよ。」

(Sa、笑う)

栗原：「ええと、私も、低い声は出ますよ。『え、あ、お』とかね。ところが、子どもの前や、講義をするときは、少し高めの声を出します。『ニャーゴ。みやにしたつや。いいですか…』そのくらい出るでしょう。その気になったら。」

\*低い声を出したあと、少し高い声での音読をしてみせることになった。「演示してみせること」は、同じ空間にいて教えることによりはじめて可能となる方法で、効果も大きな方法である。

栗原：「そうそう、ちょっと練習してごらん。」

ジョージ：「(高めの声で) 『ニャーゴ (間) みやにしたつや (間) いいですか、これがねこです。この顔を見たら、すぐににげなさい。つかまったらさい後、あつという間に食べられてしまいますよ。』

栗原：「いいです、いいです。」

竹下：「わあ。」

森田：「すごい。」

(Sa、大きな拍手)

栗原：「いいですねえ。もう、大人というのはすごいんですよ。言えばすぐ、2度目にできるんです。1回でできるんです。」

\*日本語を習得しつつある外国人留学生にとって、「声を高くしての音読」は予想以上に困難となるはずである。しかし、ジョージ君は、事もなげにやってしまった。その場で聞いていた二人の日本人学生から、思わず「わあ」と「すごい」という感嘆の言葉が発せられた。

授業者の栗原にとっても、予想を超える出来事であった。

## 10 ■ 「先生になる」とは

\*教師となって子どもの前に立つためには、物語文の冒頭の「題名・作者名・最初の会話」の音読の一つを取り上げても、発音や発声の仕方、間の取り方など、教師としてきちんとできなくてはならない事柄がある。そのことが明らかとなった。

授業者としては以下に続く場面で、教師が教壇に立つためには、たとえば音読の仕方一つにしても専門家としての力量を身につけておかななくてはならないこと

を力説するつもりであった。

しかし、結局は、「教壇に立つ」とは「become teacher」の意味であり、同じように「教鞭を執る」も「become teacher」の意味であることを説明するだけにとどまってしまった。

以下の部分は、授業者の意図のとおり語ることはできなかった部分、指導にブレの生じた部分である。

栞原：「結局ね、教師になるための、ここをね、『教壇』というんですけれどね、昔からね、先生が立つところは、『教壇』といってね、1段ほど高かったですね。この『教壇に立つ』というのが、日本語で、教師になるという意味。『become teacher』だな、あえて言えば。教師になることを『教壇に立つ』といいます。

もう1個ね、これは外国の言葉が語源です。『教鞭を執る』」

(栞原、『教鞭を執る』と板書する)

栞原：「馬さん、これ(鞭)はなんですか。」

(馬さん、鞭を打つしぐさをする)

栞原：「はい、そう。教えるために、鞭をパッパッと叩くような、鞭を持つことを『教鞭を執る』、『become teacher』。

これはね、日本の言葉ではないと思います。なぜかというとな、これ(『鞭』の革の部分指して)、革の鞭とあるでしょう。革の鞭はね、ヨーロッパや中国です。日本ではね、ムチというとな、『笞』です。だいたい日本人の使うムチは笞(竹)なんです。だから、これはね、翻訳です。『教鞭を執る』というのは、『become teacher』、『教壇に立つ』これも『become teacher』。これの例えで、日本語の中にある言葉ですね。」

以下は、「大学留学生に対する「わかる授業」の実践(3)」に続く。

(注)

(注1) 2004年度版までの東京書籍の教科書では、作品の始まる直前の1ページ分が割かれて、単元名や教材(ここでは作品「ニャーゴ」)の学習の仕方などが示されていた。しかし、2005年度版の教科書からは、全学年の全教材のこの部分に相当する箇所が削除されている。

今回の授業研究の対象とした留学生向けの「ニャーゴ」授業は2004年度3学期に実施されたので、この部分が含まれている。いずれ国語科の授業実践の歴史に残る事実なので、あえて以下に収録しておく。

「五 おもしろかった 本を 教えてあげよう

おもしろい できごとや、ゆかいな できごとが 書いて ある 本を 読むと、思わず わらいだして しまう ことが ありますよね。どうして わらいだしたのか 友だちに 話して あげたら、もっと 楽しく なりそうです。

いろいろな 本を 読みましょう。そして、おもしろかった 本の ことを「読書ゆうびん」に 書いて みんなに 教えて あげましょう。」

結論的に言えば、「読書ゆうびん」という、作品の読解とは直接に関与することのない手段を用いて、いわば「読書ゆうびん」づくりを進めることで学習を進めようとするのである。このほかに「スイミーに手紙を書こう」や「紙芝居にしよう」などの手段が取り入れられていた。

筆者栗原は、このような学習方法には子ども自身が作品それ自体を直に学習の対象にすることにならないと考えた結果、批判的であった。だから、削除された2005年度版の教科書の教材「ニャーゴ」を見て、「編集者からは何の説明もなしに、ある日突然に削除された」との感が深い。

このたびの留学生向けの授業では、いち早く、直接的に作品に触れてほしいとの願いから、まったく扱わないことにした。

(注2) 東京書籍2年国語(上)の教科書教材「ニャーゴ」は、原作の絵本『にゃーご』から取られたものである。原作は、宮西達也氏による作・絵の『にゃーご』であり、初版は1997年2月5日付けで鈴木出版(東京)より刊行された。

栗原は、2002年7月の鳥取県溝口町立(当時、現伯耆町立)溝口小学校、校内授業研究会で公開された2年生の国語授業で教材「ニャーゴ」に初めて出会うことになった。とりわけ本文第1ページの挿絵とねずみの先生の会話の言葉が、小学校2年生の子どもたちの興味や関心とも合致していて、授業をする者にとっては扱いやすい、優れた教材であることを直感した。

その年の夏、ちょうど連載を進めていた「わかる授業を創る」(山陰中央新報・松江市)の第28・29・30回の3回にわたって「ニャーゴ」を取り上げている。この記事が仲立ちとなって、教材「ニャーゴ」の作者・宮西達也氏とも会見することになった。

その後、山口大学における2003年度後期の共通教育の授業「絵本の教授学」は、「ニャーゴ」を中心に進めることになった。

このたびの外国人留学生向けの講義で「ニャーゴ」を教材とするにいたるまでに、以上のような背景がある。